

発行日 2012年6月20日 (隔月20日発行) 通巻295号

日本国際ボランティアセンター 会報誌
トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial & Error

No.295

July-August 2012

特集

「復興会議」と農村での取り組みをつなぐ 10年ぶりのアフガニスタン復興会議を前に

いまだに紛争が絶えないアフガニスタン。しかし、そうした状況を少しでも変えよう、自分たちの暮らしを良くしようと、地域で日々努力している人々もいる。写真上は、JVCが運営している診療所に備えられた地元住民の膨大な診療記録。写真下は、学校の先生たちがより良い授業運営を学ぶための教員研修の一場面。



Japan International Volunteer Center

「復興会議」と農村での取り組みをつなぐ

10年ぶりのアフガニスタン復興会議を前に

2012年7月上旬、アフガニスタン復興支援会議が10年ぶりに日本の東京で開催される。10年前の会議では、その後のアフガニスタンに対する国際社会からの支援の枠組みが決められた。しかしそれからの10年間、私たちがアフガニスタンの名前を耳にするのは、常に「紛争」や「犠牲者」といった単語とともにであったように思えてならない。JVCは、前回の会議より前の2001年から現地での活動を継続しており、今回の会議ではNGO側の会合の実行委員を担い、本会議への政策提言の準備を進めている。今回の会議が開催される前にアフガニスタンの現状をぜひ再確認してほしい。(編集部)

「対テロ戦争」時代の復興計画の実相

代表理事 谷山博史

■九・一一とアフガン戦争

二〇〇一年九月一日のアメリカでの同時多発「テロ」事件とそれに続くアフガニスタン戦争は、「対テロ戦争」の時代の幕開けとなった。「テロリスト」相手であれば国際法をも無視して他国に戦争を仕掛け、自国内でも超法規的な武力弾圧をすることがまかり通ることになったのである。アフガニスタン戦争とそれに続く「テロ」掃討作戦は、その始まりから問題解決のボタンをかけ違えた。平和の展望の见えない今のアフガニスタン情勢がその証左である。

■JVCの関わりを振り返る

JVCは戦争を止めるための平和運動に参加したが、開戦後はアフガニスタン国内での医療を中心とした緊急支援に注力することになる。そして大規模な戦闘の終結後は地域医療支援にシフトする。医療支援を通して農村地域に深く根ざした関わりを目指していた。そして〇五

年から現在のナンガルハール県シエワ郡ゴレーク地域での地域医療活動と教育活動が始まる。

■人々の憤りが生むもの

アフガニスタンの人々が対テロ戦争をどう受け止め、復興支援の帰趨がどうなるかを私たちは現場で見つめてきた。〇四年頃から人々の外国軍や援助に対する意識が変わってきた。外国軍が自分たちを助けるのではなく、自分たちを攻撃する。援助の偏りが格差と汚職を生んでいる。こうしたことに対する人々の憤りがタリバーンの活動が活発化した背景にある。

■検証なき復興プラン

国際社会とアフガニスタン政府は、これまでいくつもの復興・開発計画のマスタープランを作ってきた。〇二年に「アフガニスタン国家開発枠組み (Afghanistan National Development Framework)」〇四年には「アフガニスタンの未来の保証 (Securing Afghanistan Future)」〇六

年は「アフガニスタン・コンパクト」、〇八年には「アフガニスタン国家開発戦略 (Afghanistan National Development Strategy)」という具合にである。過去の計画は検証されないまま新しい計画が作られ、政治的なアツピールが繰り返される。そこには、テロリスト掃討のための軍事作戦に復興支援が従属しているという現実が如実に表れている。

■十年後の東京での復興会議

〇一年十二月のボン合意は戦争当事者のタリバーンを排除した和平合意であった。そのために戦争は継続し、〇二年の東京復興会議でルールを敷かれた復興は戦争と並行することになった。また、東京復興会議ではアフガニスタン市民社会の意見が反映されることはなかった。

今年七月八日、十年の時を経て再び東京で復興会議が開催される。市民の声を反映させて復興の道筋を描き、国際社会の責任ある関与を約束させることができるだろうか。

「忘れられた内戦」を繰り返さないために

アフガニスタン事業担当兼現地代表 長谷部 貴俊

■「これから」 アフガニスタンは暗い」

これは、今年二月カブールで聞いたアフガニスタン市民社会の代表者の言葉です。現在、アフガニスタンはタリバーンとカルザイ政権の戦闘だけでなく、政府内も分裂し、政府側にいる北部同盟が国軍とは別に独自で再武装していますし、タリバーンの中でもさまざまな勢力があります。

もちろん、この国の保健・教育分野での〇一年以降の進展は目覚ましいと言われていますが、社会全体としては今なお厳しい状況です。国内避難民は六十万人に達し、十八歳以下の五七%が、十分な食料や教育といった基礎サービスにアクセスできていない状況です。

このような社会状況の中で、国際社会は、軍事面での撤退だけでなく、復興支援の関与も減らそうとしています。治安権限移譲プロセスの一環として二〇一一年七月から米軍は

撤退開始し、二〇一四年までの移譲終了が合意されていますが、アフガニスタンの治安回復への道のりは遠く、国連の調査によると過去五年間で一万千八百四十六人の民間人が戦闘の巻き添えで死亡しています。

JVCが活動するアフガニスタン東部においても、過去数年間で地域社会でのタリバーンの存在感が増しています。タリバーンを支持する住民は多く、もはや戦闘での問題解決は不可能なレベルに達しています。また、東部のヌーリスタン県などでは、ほとんどカルザイ政権の影響は及んでいない状況です。

日本では「対テロ戦争」そのものが忘れ去られようとしていますし、それがもたらした結果を、国際社会は直視していないのではないのでしょうか？多くのアフガニスタン市民からは、一四年以降、ソ連撤退後のような国際社会に忘れられた内戦が繰り返されるのではないかと、いう不安の声を聞きます。

■いま議論すべきことは

そのような中、今年七月に日本でアフガニスタンの復興会議が開かれます。主な議題には「変革の十年」と銘打たれた経済成長や海外投資があげられています。しかし、上記に述べた現状をみると、これらの東京会議での議題が、本当に今必要なのかは疑問です。また、今回の東京会議を、欧米諸国の一部が「我々はアフガニスタンを自立させた。もう地元の人たちで大丈夫だ。それなので、自分たちは出て行く」という逃げ口上の場に使うのではないかと、という危惧の声も聞こえます。

今必要なのは、国際社会、日本が、アフガニスタンの自立を考えながら、どのように人道ニーズに添えていくか、長期的な復興支援にどのように関わっていくのかに関する真剣な議論です。その議論の中で重要な議題のひとつは、援助の中立性です。これまでJVCを始めとするNGOが批判してきた民軍協

力で復興支援活動をしていた地方復興チーム^{※注①}（PRT II Provincial Reconstruction Team）は、何の検証もないままに、Transition Support Team^②として役割を変えながら活動する予定です。軍事目的から人道的対応を完全に分離すること、この主張は絶えず繰り返していきたいと思います。

今回の復興会議に合わせて、アフガニスタン市民社会の代表三十名が日本に來日し、政策提言を行ないます。JVCをはじめとする約十五の日本のNGOは、アフガニスタン市民社会の代表を迎え入れ、効果的な政策提言が行なえることを目的に、「アフガニスタンに関する東京会合CSO実行委員会」を発足させました。日本とアフガニスタンの市民社会とで連携し、東京会議に向けて活動地での人々の現状や声を元に、なにがアフガニスタンの人々に必要なのか、どうアフガニスタンの市民社会が立ち上がるかとしているのかを伝えていきます。

※注① PRT (Provincial Reconstruction Team) : 軍隊と文民がチームで援助活動を行なう仕組み。しかし、一般人からは NGO などの人道支援機関との区別がつきづらくなることから、「活動の中立性が脅かされる」との NGO からの批判もある。

和解への道筋をつけるための取り組みを

東京大学大学院総合文化研究科准教授 東大作

■和解による平和を

求めるアフガン人

アフガニスタンの平和を考えると、ある種の徒労感を覚える人がいるのは事実である。アメリカのアフガン侵攻が起きた二〇〇一年から、国際社会はアフガン復興に多額のお金を投入し、その国づくりを支援してきた。しかし〇四年頃から治安状況は悪化し続け、現在タリバーンなど反政府武装勢力は、アフガン全土の約七割を実行支配していると言われる。最大十万人の兵士をアフガンに派遣していた米国も、一四年末までに撤退すると明言している中、その後一体どうなるのか。ソ連撤退後のような凄惨な内戦が起きるのではないかと多くの人が危惧している。

私のアフガニスタンとのつきあいは、〇八年からだ。当時カナダの大学の博士課程にいた私は、UNAMA（国連アフガニスタン支援ミッション）の全面的な

サポートを得て、アフガン各地で調査を行なった。政府閣僚、地方の有力政治家、軍閥の指揮官、国際機関のトップ、さらにカンダハールとワードアック、キャピサの三県で三百人近い一般市民のアンケート調査をした。この調査で驚いたのは、「アフガンの平和を実現するには、タリバーンを含めた反政府武装勢力と和解するしかない」と確信している人が、多数派のパシュトゥーン人、少数派のタジク人を問わず、圧倒的多数であったことだ（拙著『平和構築』参照）。そして、カルザイ政権の中枢にいる人たちも「軍事的な解決はなく、和解によってしか平和は生まれない」という共通認識を持っていた。

■鍵を握るアメリカ、だが

当時和解について態度がはっきりしなかったのは、ブッシュ政権下のアメリカだった。私はその年提出した国連PKOへのレポートの中で、「アメリカを

含めた新たな和解の枠組みを作るべき」と提案したのもそうした理由だった。その後イスラム世界との和解を掲げるオバマ政権が登場し、少なくとも「中堅幹部や草の根兵士」とは和解する姿勢が明らかになった。アメリカを含めた包括的和解プログラム設置の可能性を感じた私は、その後ホルブルック・アフガンパキスタン特使の副官だったポールジョーンズ氏に〇九年九月にワシントンで会い、日本が和解プログラムの設置について主導することについて意見を聞いたところ、全面的な賛成を得た。それを受けて、日本で外務省の関係局長や政策担当者、就任したばかりの岡田外務大臣（当時）等にもその案を話す機会に恵まれ、結果的に〇九年十一月に発表されたアフガン支援主要三政策の一つに和解の支援が採用されることになった。

その年十二月、私はUNAMAの政務官としてカブールに勤務し、新たな和解プログラムを

設立する国連側の実務責任者になった。UNAMAとアフガン政府の和解担当大臣の強い主張で、一〇年にできた和解プログラムには「タリバーン幹部との交渉や和解」も明確に盛り込まれた。アメリカもそれを受け入れ、新たな基金もでき、交渉を推進するための平和最高評議会も設立された。

しかしその後、アメリカとタリバーンの話し合いが始まったと報道されるたびに、最高評議会の議長が暗殺されたり、大規模な攻撃が米・タリバーン双方から行なわれたりして、挫折を繰り返している。現在は、タリバーンがカブールに代表部を置いてアメリカと交渉を始めることを、カルザイ政権は正式に認めているが、タリバーンが交渉開始の条件としているゲアンタナモ収容所からの幹部の開放がまだ行なわれていないこともあって、正式な代表部発足には至っていない。

私は今年三月、ニューヨーク

アフガニスタンに関する年表（編集部作）

年月	アフガニスタンにまつわる出来事	JVC の関わり
2001/9	アメリカ同時多発「テロ」事件発生。	
10	米国主導の連合軍がアフガニスタンを空爆開始。	
11	カブール陥落。	緊急支援を実施（食料と毛布の配給、巡回診療活動）
12	ボン合意：アフガニスタン国民を代表する暫定政府を設立し、和解と平和を促進、民主選挙による政権樹立を目指すことに合意（タリバーンは参加せず）。また、国連が国際治安支援部隊（ISAF）を承認。以降、ISAF がアフガニスタンの治安維持にあたることに。	
12	カルザイ氏を議長とする暫定政府が成立。	
2002/1	アフガニスタン復興支援会議（東京会議）：国際社会は今後 45 億ドル以上の支援を約束。	
3	国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）設立。	東部ナンガルハール県で 4 月から医療支援を開始。
6	緊急国民大会議（ロヤ・ジルガ）によって、カルザイ氏を大統領とするアフガニスタン・イスラム移行政府が成立。	
2003/1	米軍がアフガニスタンにて地方復興チーム（PRT）活動を開始。	
10		伝統産婆支援開始。
2004/1	国民大会議（ロヤ・ジルガ）の後、アフガニスタン憲法が制定。	2 月、クナール県で診療所支援。
4	ベルリン会議：「アフガニスタンの未来の保障」の合意（7 年以内に 80%の国民が貧困から抜け出すことを目標とした）。	
10	大統領選挙実施、これによって 12 月にカルザイ氏が大統領就任、アフガニスタン・イスラム共和国成立。	
2005/3		ナンガルハール県ゴレーク地域で地域保健活動を開始、現在に至る。
9	下院、県議会選挙実施（ボン・プロセスの終了）	
12	アフガニスタン国会が開会。	
2006/1	ロンドン会議：「アフガニスタン・コンパクト」の合意（今後 5 年間のアフガニスタンの国づくりに国際社会が関与すると約束）。	
2007	首都カブールで自爆テロなどが頻発。	「アフガニスタンにおける対テロ戦争と日本の軍事支援の見直しを求める声明」を発表（10 月）
2008/6	パリ会議：「アフガニスタン国家開発戦略（ANDS）」の合意（今後 5 年間の貧困削減戦略）。	
2009/2	オバマ大統領が 17,000 人規模の米軍増派を発表。	
8	カルザイ大統領再選。	
2010/7	カブールで支援会議が開催。ANDS の優先付けの結果である 22 の国家優先プログラムを発表。	
11	リスボンでの NATO サミット：2014 年までに ISAF からアフガニスタン国家治安部隊に治安権限を委譲することを合意。	
2011/5	ビン＝ラディン氏殺害。	
12	ボン会議：ISAF 撤退予定の 2014 年の後も 10 年間国際社会の関与を合意（タリバーン、パキスタンは参加せず）。	「アフガニスタン再生のために今求められている日本政府の役割について」発表
2012/7	アフガニスタン復興支援会議（東京会議）。これと同時に、アフガニスタン復興支援市民社会会議も開催予定。	「アフガニスタンに関する東京会合 CSO 実行委員会」発足、実行委員長に谷山。（5 月）

ク市立大学をはじめ、アメリカ各地でアフガン和解について講演を行なったが、アメリカの研究者や一般市民には「アフガンから撤退することが現在のアメリカの最大の目的」と言う人が多く、〇八年頃との違いに愕然とした。一方、タリバーンの最大の目標がアメリカ軍のアフガンからの撤退である以上、タリバーンとアメリカの間には話し合いが成立する可能性はある。あとは、カルザイ政権とタリバーン、そしてタリバーンに影響力を持つパキスタンが、アメ

リ力を交え、どう統治形態の問題で合意できるかが、最大の焦点となる。

■日本人としてできることを

日本ができることは、おそらく将来どのような政権や政体になってもアフガンを支援し続けるというこれまでの方針を堅持し、アフガン人の一人一人の生活向上のための支援を続けていくことだと思う。さらにそこから生まれている信頼を活かし、少なくとも政治交渉による解決が可能になるようなお手伝いを

することだ。具体的には、UNAMA の仲介作業を側面支援するために、UNAMA の和解専門のオフィスをドバイなどに設置することに、日本が財政支援することなどが考えられる。アフガンで勤務していた時、仲間の一人でスーダン出身の女性に私がぼつりと語った「人間、そんなに戦争はできない。二十年であれ三十年であれ、いずれ戦争を止めることになる。その日まで私たちも努力するしかないんだ」という言葉が忘れられない。私もいつか来る平和

を信じて、自分なりに、アフガンの和解を応援していきたい。

東大氏プロフィール・
東京大学大学院総合文化研究科准教授。九三年から〇四年までNHK報道局ディレクター。企画制作した『イラク復興 国連の苦闘』は世界国連記者協会銀賞を受賞。その後、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学の修士課程と博士課程を経て、〇九年より「国連アフガン支援ミッション・和解再統合チームリーダー」。一年一月より現職。著書に『平和構築』（岩波新書）他。

アフガニスタン人として思うこと

二〇〇二年からアフガニスタンに事務所を構えてきたJVCには、もうベテランと呼べるアフガニスタン人スタッフが多数います。激動の時代をNGOスタッフとして、ひとりのアフガニスタン人として生きている彼ら／彼女らの声を紹介します。

豊かな将来を描けない社会

サビルツラー・メモラワル

(治安／総務担当)



これまでのアフガニスタンは、常に誰かのうまい話に乗ってその時々

の権力にすぎず、最終的な判断を誤ってきた。十一年のタリバン政権崩壊から十一年の間、他国の決定を待ち続け、いまなお他国の判断に左右される不確かな状況にアフガニスタンは置かれています。

私たちの社会は自信を失っています。そんなことはこれまででなかったことです。二〇一四年に米国が本当に去るのか、その後何が起きるのか、軍隊や警察をはじめ自国の政府は信じられるのか、経済や暮らしは成り立っていくのかとわからないことばかりで、誰もその答えを知

りません。国際社会が約束したことも、九二年の旧ソ連撤退後の内戦を経験した者はそれすら信じるできません。

私は七年間JVCで働いてきました。NGO職員として思うことは、人々が望むことは世界共通で、安全や食料の確保、雇用や教育、医療サービスが得られること、それがアフガニスタンの場合イスラム法や文化に則っていることだということです。そのニーズを満たすためには人々と一緒に優先順位を決めたり判断したりすることが大事ですが、実際にはるかに調査もせずアフガニスタンの文化も知らない人が国外でプロジェクトの内容を決め、PRTのよう^{※注①}な、アフガニスタンの人々が受け入れがたい組織に支援を担わせることがままあります。こういった巨額の投入の割に成果が少ない支援は、資金の行方がわかりにくく人々から疑問視されています。

最近、こんなことがあります。あるテレビ局で働く男性が見合い結婚を希望しました。私は彼と相手の女性の家族との仲介役を任せられ間を取り持ったのですが、女性の方が断ってきました。理由を聞くと、家族も本人も申し分ないのですが、彼がテレビ局でアナウンサーをしていればいざ反政府勢力の攻撃対象になり娘が寡婦^{ウドバ}になったら不幸だからという答えでした。

これが現実です。二〇一四年以降何が起きるのか、皆不安なのです。

自立できる自分たちで

ありたい

モハンマド・シャプール・サフィ

(医師、医療事業責任者)



三十三年前まだアフガニスタンは戦争が起きていなかった頃、人々はコミュニケーション

や社会の一員として協力して暮らしていました。今はどうでしょう。ほとんどの人が外国からの支援に頼りきっています。これが私たちの社会の一番大きな問題です。

米国やNATOの軍隊は、私たちの信じる宗教を蔑み空爆でモスクを破壊したり人々を犠牲

前から5列目(4名) 左から:イザトゥッラー、デラワール、シャー・モハンマド、サビルツラー
前から4列目(4名) 左から:ザマヌラー、アガ・グル・パチャ、ライズ、グラライ
前から3列目(4名) 左から:ナシーム、ラヒーム、トラブ・ハーン、サファラガ
前から2列目(5名) 左から:ラジーク、ジャハン・ミール、イサヌラ、アジマール、ミル・ジャマル
最前列(5名) 左から:ラジア、ファティマ、ワグマ、バスマナ、シャムシー・グル



左から:ジャナット・グル、ハビブラフマン、カン・ミル、フルシード

※注① PRT: 本誌3ページの注を参照。

アフガニスタン事務所 (32 名)

モハンマド・シャプール・サフィ
(医師、医療事業責任者)

アメリカ軍撤退後のアフガニスタンで平和が続きますように。

アブドゥル・ワハブ(医師、地域保健責任者)
みんなで良く働いていい年にしよう。

ファティマ・カディム(地域保健担当)
女性の健康と地域での活躍を願います。

ワグマ(簡易診療所助産師)
女性の命を守り、長生きできるようにしたい。

モハンマド・ナシーム(医師、簡易診療所長)
私たちの信仰を侮辱した米国は去ってほしい。

ジャハン・ミール(医師、診療所長)
健康教育を通して村の人々と触れ合いしたい。

ラジア(医師、診療所)
誠心誠意医師として人々につくしたい。

シャムシー・グル(診療所助産師)
助産師として成長したい。

グラライ(診療所検査技師)
自由に教育が受けられるような平和な国になってほしい。

モハンマド・ラヒーム(診療所看護師)
誠実で敬虔な人間として人々につくせるようになりたい。

ライーズ・アフマッド(診療所薬局担当)
コミュニティの人たちに満足してもらえるような仕事をしたい。

フルシード(ワクチン接種担当)
人々のために働けるよう平和で安全な社会にしたい。

ファゼル・ハック(ワクチン接種担当)
国が平和で安全になり良い変化を起こせるように頑張って働きたい。

ハビブラフマン(診療所守衛)
より良い生活を送りたい。

ジャナット・グル(診療所守衛)
診療所のサービスを向上させたい。

サビルッラー・メムラワル(治安/総務担当)
人道支援の役を担い人々の安全と教育のために働きたい。

サイード・サファラガ(調達/総務担当)
将来は自分の土地で農業をやりたい。

アジマール・クラーム(教育支援担当)
かけがえのない友人や家族のためにがんばります。

イサヌラ・カタック(経理担当)
自分の研究をまっとうし、学位をとりたい。

トラブ・ハーン(経理補佐)
深刻な貧血を患っている子どもたちのために働きたい。

シャー・モハンマド(運転手)
平和が世界になりますように、インシャアッラー。

ナビ・ジャン(守衛/運転手)
妻が長年病気なので元気になってほしい。

デラワール(守衛主任)
健康で豊かになり人々のためにつくしたい。

イザトウッラー(守衛)
子どもに教育を受けさせたい。

アガ・グル・パチャ(守衛/運転手)
家族のために今年は家を建てたい。

ミル・ジャマール(簡易診療所薬局担当)
アフガニスタンが平和と発展した国になりますように。

ザマヌラー・メムラワル(守衛/運転手)
僕たち家族が安全に暮らせますように。

アブドゥル・ラジーク(守衛)
今年は自分の家がほしい。

バスミナ(調理担当)
子どもの将来のために夫にも協力してほしい。

シャハブディン(簡易診療所守衛)
地域の人たちが満足するような診療所にしたい。

アシール・モハンマド(簡易診療所守衛)
JVC とコミュニティのために働きたい。

カン・ミル(診療所庭師)
アフガニスタンが緑豊かな国になってほしい。



左から：ワハブ・ナビ、シャプール



左から：アシール・モハンマド、ジャハブディン、ラヒーム

にしてきました。いまさらそれを謝罪されても、私たちに返す言葉はありません。それで子どもたちの命が戻ってくるわけではないのです。むしろ、人々を犠牲にしたり拙速な「援助」で自立心を奪うようなことをしてほしいくないのです。

いま私たちの社会に必要なのは、支援に頼るのではなく自身で生計を立て暮らしていくようになることです。そのために、まず恒久的な平和を手にすること、それも誰かの助けを待たなくても自分たちでそれを実現できるように知識や技能を学ぶ機会を見つけ達成していくことなのです。その知識や技術

を活かし皆が力を発揮できる雇用場を生み出していくことが必要なのだと思います。

平和と安心できる暮らし、そのためには働けること

ファティマ・カディム
(地域保健担当)

私たちにとって大切なのは、平和と、日々安心して暮らせる、ということです。その意味でも、二〇一四年以降にアフガニスタンの情勢が悪くなるのではないか、隣国の関心が減っていくのではないか、人道支援が減って開発が止まってしまうのではないか、治安が



二〇一四年以降にアフガニスタンの情勢が悪くなるのではないか、隣国の関心が減っていくのではないか、人道支援が減って開発が止まってしまうのではないか、治安が

悪化し再び国際社会から忘れられていくのではないか、といったことがとても気になります。

街の中の様子、例えば橋とか道路が良くなり教育や医療サービスが前より改善されたことは目に見える変化だと思います。それによって、アフガニスタンの人々は幸せを感じ支援国に感謝していると思います。いま一番の問題は、経済が疲弊していることと失業率の高さ、教育の質の低さだと思います。もし、もっと就職の機会が増えて人々が働くことができれば、国の発展も早まり反政府勢力に加担する人も無くなると思います。

(翻訳：谷山由子)

東京事務所 (26 名)

谷山 博史 (代表理事)

地元の阿波踊りを通じた近所づきあいで震災に備え、畑仕事で食料危機に備える。

磯田 厚子 (副代表)

やりたいことに追われて取りこぼしの多い年月でしたので、今年は足元を見つめます。

清水 俊弘 (事務局長)

25年務めた JVC を卒業し、いよいよカフェのマスターに。山梨でスローライフを実践!

長谷部 貴俊 (事務局長)

新事務局長として、マイペースだけど毎日真剣に!

宮田 敬子 (タイ事業担当)

ギターでジャズを弾けるようになって、皆の前でかっこよく披露できるようになる。

山崎 勝 (カンボジア事業担当)

初志貫徹。過去の抱負の再試験。

平野 将人 (ラオス事業担当)

久しぶりの日本在住なので、地域社会に積極的に関わりたいと思います。

渡辺 直子 (南アフリカ事業担当)

日本滞在期間が長くなるはず(?)の今年。猫とぼーっとしたい。

加藤 真希 (アフガニスタン事業担当)

スタッフ一年生なので、素直に食欲に学習してアフガン通になる(あと会計業務も)。

谷山 由子 (震災支援担当 / アフガニスタン事業担当補佐)

地元で3年目の畑仕事と2年目の阿波踊りのお雛子を、南相馬では相馬弁を鍛えます。

西 愛子 (アフガニスタン事業保健アドバイザー)

修学旅行生のホームステイ受入れ家庭として登録。にわかカアチャン業に励みます。



後列(8名)左から: 細野 平野 津高 山崎 池田 荻野 下田 高橋
中列(10名)左から: 谷山由 宮田 石川 広瀬 島村 渡辺 佐伯 磯田 寺西 白川
前列(5名)左から: 稲見 清水 谷山 長谷部 武繁
枠外左側・上から: 西 藤屋 加藤

津高 政志 (パレスチナ事業担当)

新事務所の近くのおいしいお店を全部制覇してグルメな生活を満喫する。

佐伯 美苗 (スーダン事業担当)

整理整頓。

寺西 澄子 (コリア事業担当 / 会員担当)

注意力散漫に拍車がかかり、忘れモノ・無くしモノ数知れず。机の上整理ボラ募集。

下田 寛典 (緊急支援担当)

妻の出張にもへこたれない家事力と、妻不在中の息子との固い結束を手に入れる。

白川 徹 (震災支援担当)

禁煙を継続したいです。今回だけは「インシャッサー」ではなく、自分の意思で!

高橋 清貴 (調査研究・政策提言担当)

月2回は三里塚で農業。そしてフルマラソン。これで学生時代の体重をキープ、のはず?

藤屋 リカ (海外事業担当)

「進行」が「侵攻」「若い」は「和解」「先頭」も戦闘。紛争地モードの日本語変換を是正!

武繁 政昭 (経理担当)

アラビア語を習得して、現地の人とコ

ミュニケーションをとれるようになる。

池田 未樹 (経理担当)

抱負!? 抱いたらあかん負けやねん。豊富なんは中身のタコだけで十分やん! ちゃう?

稲見 由美子 (経理担当)

受験生の子どもに辛くあたることなく、優しい母でありたい。

広瀬 哲子 (広報担当)

アラフォーまっくら! カーヴィーダンスと「皇居 Run & Beer」で健康維持☆

細野 純也 (会報誌レイアウト / 総務担当)

サッカー観戦力向上は生涯の目標に格上げ。よって今年は本職の技量をより磨く。

荻野 洋子 (カレンダー事務局)

JVC 卒業します。19年、皆さんがいて私がありました。次はアフリカダンサーに!

島村 昌浩 (カレンダー事務局)

昨年骨折をした結果、運動不足で体重が増えたので、カロリー消費量を増やします。

石川 朋子 (コンサート事務局)

Facebook でエチオピアの友人と再交流。メールや会話をするためにアムハラ語を学ぶ。

JVC STAFF 2012



左から: チャンリッツ、樋口、ロット、ソ・マツチ、ティアラット、ソッカー、ライ、サリー
枠内: ヒエン

若杉 美樹 (現地代表)

仕事に励み楽しみつづ、体力増強のため自転車通勤と運動を継続します。

ヘン・チェン・ンガウ (総務担当)

英語向上、ビジネスの準備、外国にいる母と会うのも楽しみ、小さい車も欲しい!

パオ・リツ (CLEAN 運転手 / 総務補佐)

JVC で楽しく働きたい、チームワークを良くするぞ! 家族も円満に。

坂本 貴則 (CLEAN マネージャー)

自転車のブレーキが壊れたので、貯金を貯めて新しい自転車を買いたい。

サム・ネアリー (CLEAN コーディネーター)

マネジメントの修士号を無事修了したい。新居も建てたいんだけどなあ。

ブラム・ナビ (会計担当)

英語の向上と、年末には大学で勉強も始めたいんだけど時間あるかしら?

サー・スイネン (清掃担当)

家族の健康が一番、特に姉妹の健康が心配です。

イン・コック・エン (資料情報センター (TRC) 司書)

健康に気をつけて業務に集中したい!

ヒ・タン・ホーン

(CLEAN 環境教育フィールドスタッフ)
環境教育活動の森林保全を進めつつ、環境について勉強する。英語も向上したい。

ボム・ボン・ルーン (運転手 / 総務補佐)

健康に気をつけて、安全運転を心がける。

ダン・ソン (警備 / TRC 補佐)

今後ずっと JVC で働きたい! もう年なの

で、健康にも気をつけないと...

チン・ブン・ヒエン (警備 / TRC 補佐)

コンピューターの勉強と機械修理のスキルを身につけたい。

ミク・チャンリツ (CLEAN フィールドスタッフ)

トヨタのカムリを5年以内に買うぞ!

樋口 正康 (CLEAN 環境教育マネージャー)

情報発信、まず自分が動くことから。

ムット・ロット (CLEAN フィールドスタッフ)

5,000 ドル以上貯金すること。家族とより多くの時間が過ごせるように。

ミエン・ソ・マツチ

(CLEAN フィールドスタッフ)

英語の勉強。農民のための農業技術を学ぶ。貯金して2階建ての家も買いたい!

セン・ティアラット

(CLEAN 環境教育フィールドスタッフ)

周囲の人の規範になりたい。

モーン・ソッカー

(CLEAN フィールドスタッフ)

試験農場監督として去年よりも頑張る。家族のビジネスもうまくいきますように。

ネアック・ライ (CLEAN フィールドスタッフ)

仕事の経験を積み、人生の選択肢を広げいきたい。

シエン・サリー (CLEAN フィールドスタッフ)

お互いの経験を共有することで人々の革新へつなげたい。ジョークも忘れないよ!

エルサレム事務所 (1 名)



福田 直美 (現地代表)
パレスチナの人たち含め、これまでお世話になった方たちへの恩返しに励みます。

イラク事業 (1 名)



原 文次郎 (イラク事業担当)
新事務所への引っ越しを機に、東京では自転車通勤にチャレンジ! 実現は…?

スーダン事業 (5 名)

今井 高樹 (現地代表)
インド洋に浮かぶ島で1週間くらいぼーっと… (ありえない)

モナ・ハッサン (プログラム・コーディネーター)
ロタナ・ホテル (ハルツームの高級ホテル) のバイキングでお腹いっぱい食べたい。

アダム・ユヌス (プロジェクト・オフィサー)
いつも妻に「狭い」と不満を言われるハルツームの家を増築したい。

インティサル・マハディ
(フィールド・オフィサー)
今は別れて住んでいる家族と一緒に暮らせること。

イルハム・イルアミン
(プロジェクト&アドミニ・オフィサー)
会計業務に少し慣れてきたので、次はプロジェクトマネジメントを勉強したい。



上段左から:
今井、モナ、アダム
下段左から:
インティサル、イルハム

南アフリカ事務所 (2 名)



富田 杏子 (プロジェクト・マネージャー)
南アの大型スーパーマーケットにめげず、地産の新鮮な食材を開拓する。

ドウドウジレ・ンカビンデ
(プロジェクト・コーディネーター)
自分らしく、先のことは考えすぎず、日々感謝の気持ちをもって過ごしたい。

気仙沼駐在 (3 名)

山崎 哲 (震災支援現地統括)
親孝行する。倏約する。甘い物とカフェインを控える。ユーモアのセンスを磨く。

岩田 健一郎 (震災支援担当)
読まずじまいになっている本、観たいと思っている映画。今年こそは、味わいたい。

石原 靖士 (震災支援担当)
今年 30 歳になります。充実した 30 代を送るために肉体改造に取り組みます!



石原、山崎、岩田

ラオス事務所 (14 名)



枠内: アロニー、スマリー

後列 (5 名) 左から: フンパン、センチャン、イントーン、グレン、センスリー
前列 (5 名) 左から: マライワン、アリワン、ペダワン、ホンケオ、レノル

グレン・ハント (現地代表)
政府との覚書を早く結び、現地代表としてプロジェクトを成功裏に進めたいです。

フンパン (ラオス人リーダー)
すべてのスタッフが平等で団結し、自分の役割をきちんとまとうことを願います。

ペダワン (森林チームリーダー)
子どもが欲しいです。スタッフがひとつにまとまることを望みます。

センチャン (森林チーム)
できるだけ早くサワナケートで娘と一緒に住めますように。

センスリー (農業チーム)
実家の家が完成しますように。JVC に新しい事業用の車を買ってほしいです。

マライワン (庶務担当)
12 月に友達と高地ラオ族のお祭りを見に行きたいです。仕事では失敗を減らすこと。

アロニー (会計担当)
自宅に保育園を開きたいです。

ホンケオ (森林チーム)
実家のある村にゴム植林が入ってきませんように。家族が 1 年幸せでありますように。

レノル (森林チーム)
私と家族親族が昨年以上に幸福でありますように。活動がうまく進みますように。

アリワン (農業チーム)
将来商売をすることができるよう、毎月貯金をしたいです。

ホームパソン (運転手)
JVC が新しい事業用の車を買って、対象村訪問が楽になりますように。

ブンクム (運転手)
スタッフが団結して活動にあたり、自分もそれを支援すること。

スマリー (庶務担当)
妹の学校が終わる前に、オーストラリアを訪問したいです。車を買いたいです。

イントーン (森林チーム)
英語を上達させたいです。スタッフがみな幸せで貯金ができますように。

カンボジア事務所 (20 名)



後列 (7 名) 左から: ネアリー、ナビ、スイネン、エン、ホーン、ルーン、ソン
前列 (4 名) 左から: 若杉、ンガウ、リツ、坂本

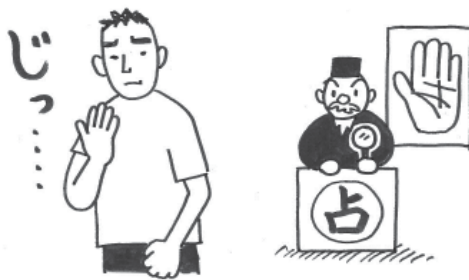
南相馬駐在 (1 名)



檜崎 知行
(震災支援担当)
柔らかい心で、できるだけ南相馬と共感しながら、役立つことを見つけて実行したい。

手

気仙沼事業 震災支援担当 岩田 健一郎



はたらけど はたらけど猶
わが生活楽にならざり
ぢっと手を見る

(石川啄木「一握の砂」より)

人口に膾炙した啄木の歌が、時折
ここに浮かぶ。啄木が人の生活
を見つめた時、ふと視線を向けたのは
その手であった。

私の手はお世辞にも格好のいい手
ではない。幼い頃から治らない爪を
かむ癖が、なおさらそれを不格好に
している。無理をして机に向かった
時にできたペンだこが中指に残った
ままだ。めっきり楽器を手にしなく

なったために、指先はふにゃふにゃ
している。今はただ、少しばかりヤ
ニばんでいるだけの手だ。

私は母の手が好きだった。母のこ
とを思う時、なぜかその手を思い出
す。ろくろく家事もせず、ただ芝居
に明け暮れた人であったためか、ど
こか生活感のない手をしていた。と
りわけ、紫煙をくゆらせている時の
母の手が、好きだった。ずっと伸び
た二つの指が、その手を妙に美しく
見せていた。

海で生活を営んできた人の手は、
一目でそれとわかる。指は太く、節
くれだっていて、手の甲は分厚い。

爪はつやを失って、土気色をしてい
る。無数のしわが、深く、全体に刻
まれている。武骨で、たくましさ
をたたえたその手は、見る者を包み込
むような温かみを持っている。

彼らはその手で、飽きることなく、
縄を結び、網を引き揚げ、豊かな海
の恵みを受け取って来たのだ。来る
日も来る日も使い込んできたその手
には、生活そのものがにじんでいる。
手が、その生きざまを語っている。

改めて、じっと自分の手を見てみ
る。何もかも語っていない手だ。い
や、何もものでもないことを、語っ
ている手だ。

DVD 『お米が食べられなくなる日』

大野和興監修／PARC制作／2012年／35分／本体 8,000円＋税 (図書館価格：本体 16,000円＋税)



このDVDは、NPO法人P
ARC (アジア太平洋資料セン
ター) が制作したもので、現在
の日本のコメ作りに関する問題
点を取りまとめたものである。
最初に、日本の稲作に関して、
これまでの国内の農業政策の経
緯や稲作農家の労働の時給換算
などを含めて紹介している。次
には、食糧貿易の問題点として、
主食を輸入に頼った場合に考え
られる懸念点をメキシコや〇八
年の食糧危機の事例をもとに指
摘。ここでは、日本が困ること
だけではなく、他の輸入国への
影響も含めて言及されている。
私たち日本人には、様々な経
緯から食べ物に関して「国内産
＝安全」といったような意識が
広く浸透しているように思え
る。そしてそれに対しては「国
内産の食べ物は安全だから少し
くらい高くても買う」という行
動が対応する。これは、「安全
な食べ物」を買う際に「安心」
の価格を上乗せして買っている

(そしてちよつとは「生産者へ
の応援」も、すなわち「安心を
(お金で)買っている」という
ことなのだ。しかし、消費者側
が「お金があれば 安心を買え
る」と思っている、それはい
つまで続けられるのだろうか。
そもそも、はたして国内の生
産者の側は今現在安心を買えて(売
れて?) いるのだろうか。
人の行動は、その人の価値観
によって決まる。そしてそれは、
何をもってしても変わらないこ
ともある一方で、実はちよつと
したきっかけで変わったりもす
る。このDVDの後半では、そ
うしたことへのヒントが紹介さ
れている。言ってみれば「お金
以外のもので安心を手に入れる
方法もある」といったものだ。
私たちの日々の買い物が市場
に価格シグナルを送っているこ
とを忘れてはならない。市場に
乗っているものは、売れなけれ
ば消えるしかないのだ、誰にも
知られずに、ひっそりと。いま
私たちが食べ物を誰から手に入
れているかということが、実は
その食べ物の生産者の人生と、
これまで数百年にわたってはぐ
くまれてきた農村の営みの行く
末を決めているのだ、というこ
とに改めて思い至る作品である。

(総務担当 細野純也)

JVC は、現在 9 の国 / 地域と東日本大震災被災地で活動しています。

東日本 大震災

■宮城県気仙沼市

気仙沼市鹿折地区で復興支援を展開中。養殖業再開支援ではワカメの収穫が 4 月末に終了。浦島小学校の周辺で仮設住宅の住民も



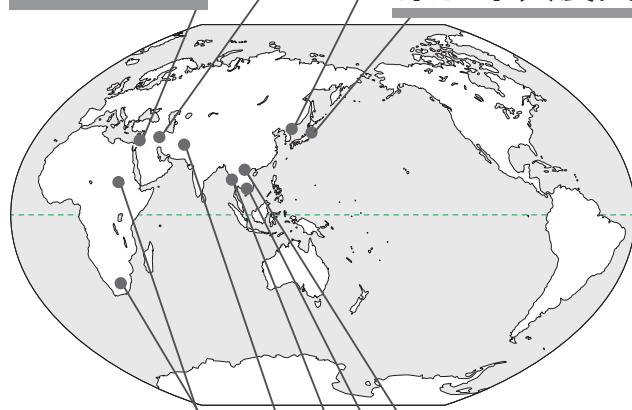
■浦島小学校周辺での畑づくり。

参加できる菜園づくりを開始した。防災集団移転事業を希望する住民と、高台移転後の住まいやまちづくりについて外部アドバイザーも含めて意見交換する場を持った。東京では気仙沼の現状を発信する月一回の報告会を開始。(下田)

■福島県南相馬市

災害 FM では 5 月から番組を改編、南相馬の歴史や人に焦点をあてたプログラムを設置。芥川賞作家の柳美里さんが FM 局に参加、毎週南相馬の方々の声を拾い集める番組を開始。サロン活動では計 6 カ所の仮設住宅で活動を継続中、民謡教室や一坪菜園のプロジェクトを開始した。(白川)

イラク パレスチナ 東日本大震災 コリア



スーダン 南アフリカ アフガニスタン ラオス カンボジア タイ

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07 年からシェムリアップ県東部で活動を実施。4 月以降カンボジアは雨期に入ったが、活動地ではまだ雨が降っていない地域も多い。



■海谷氏(左から 2 人目)の説明を熱心に聞く生徒たち。

堆肥作りの訪問研修を行ない 4 村から 32 名の農家が参加、すでに実践している農家と意見交換を行なった。

■環境教育

09 年 4 月からシェムリアップ県東部の小学校で実施している。CLEAN チームと共に森林に関する調査を引き続き行っており、5 月に 2 回目を開催した。20 年前と比べ数種類の樹木がすでに失われていること、奥地に地雷未処理の場所があることなどが判明した。3 回目も実施予定。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を 94 年から提供中。蔵書は安定して増加しており、本のバックラベルを見やすく貼り替えたり、夏には蔵書カタログの一新を検討中である。オリエンテーションも好評につき継続中。

■技術学校

85 年に政府と合意し、プノンベンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。日本から海谷氏がボランティアとして 2 ヶ月間カンボジアに滞在し、修理工場や学校のマネジメントに関してアドバイスをを行なった。(若杉)

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

農業では、3 月上旬のピン郡に続いて、下旬にアサボン郡で



■大学生による林産物調査。

SRI (幼苗一本植え) スタディーツアーを 2 回実施。これに伴い、今年度雨季に初めて SRI を実践する村用に、堆肥液肥研修を実施した。SRI 乾季作の収量調査も行なった。米銀行では、帳簿のチェック・集計と振り返り会議、規則改善を未実施の村で実施した。また、ラタン栽培ではカムアン事業で栽培に成功した農家を講師に栽培研修を行ない、苗の分配を実施。その他、タイで行なわれた在来種保存に関する交流会に参加した。

森林では、3 月下旬に 1 村で PLUP を実施し、土地森林区分を表示した掲示板を完成させた。また法律カレンダーを使用しての法律研修も引き続き実施した。ラオス国立大学の学生を受け入れ、土地問題や林産物についての調査も実施したほか、JVC とは長い関係を持つタイの NGO、TERA の土地問題に関する調査にも協力した。また、4 月上旬には PLUP の実施状況を視察するスタディーツアーを実施、対象郡の行政官とともにラオス北部の 2 県を訪れた。その他「栄養に富んだ食料の確保」という観点から農業と自然資源を結びつける研修に農業・森林チーム両方からスタッフを派遣した。(平野)

タイ

■農村派遣研修

タイの農村で学ぶインターンシッププログラムでは、2011年度参加者の修了時期を迎え、滞在期間中の振り返りを実施。



■プログラムの7ヵ月間を振り返るインターン生。

この7ヵ月間の変化や支援に関しての考え方について話し合った。インターン生の1人は「すべて答えが出たわけではないが、この経験が今後どのように生きていくのが楽しみ」と話した。帰国後、外部向けの報告会を実施。報告会の参加者からは「インターンが現地で真剣に悩み苦しんだ様子がよくわかった」との感想があった。現在、次期インターンの募集を開始し、説明会も開催している。

■日・タイ若手農民交流

福島県の農家を訪問。震災後、原発事故の影響があったものの、人づくりを基盤とした地域づくりを行なってきた地域と今後交流によってつながっていくことを目指す。

(宮田)

■南タイでの在タイビルマ人医療支援

北タイにある在タイビルマ人を対象にする医療施設に3名の地域保健員を派遣した。これから1年間、保健医療の研修を受ける。今年度、ビルマ/ミャンマー国内での活動の可能性を探るための調査活動を計画しており、2010年の総選挙後のビルマ/ミャンマー国内の変化について情報収集を行なっている。(下田)

イラク

■地域社会支援

2月からキルクークで実施の「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップは3月31日に地元住民を招いた発表会をもって終了した。その後、振り返りの質問票を使い、参加者家庭の戸別訪問によるインタビューも実施した。



■子どもたちと面談(5月11日スレイマニヤ)。

この成果を見るため、5月にJVCより2名が北イラクに出張し、参加者の子ども、保護者、校長先生や現地の実施パートナーのNGOであるINSANのスタッフなど地域関係者と面談した。子どもたちが家庭や隣近所でワークショップの様子を語り、学んだ内容を実践していること、保護者も前向きに評価していることがわかった。通算4期目で交流以上の成果を期待するJVCの働きかけに応え、INSANスタッフが工夫を凝らし、参加型のワークショップとすることで子どもたちの興味をつないだ結果とも言える。(原)

南アフリカ

■HIV/エイズ(リンボポ州)

リンボポ州ベンベ郡において2012年4月から3年間でHIV/エイズ予防啓発および陽性者支援強化プロジェクトを実施していく。活動は現地NGO・



■評価インタビュー実施。右端はカンボジア担当の山崎。

LMCCと協働で行なう。3月にはその準備として26～30日にLMCCに所属する在宅介護ボランティアや子どもをケアするボランティアと具体的な活動内容案とスケジュールを共有するためのワークショップを実施した。4月6日にはプロジェクトマネージャーの富田杏子が着任し、下旬よりLMCCとの具体的な活動準備、研修のトレーナーとの調整や今後の活動の参考とするために他NGOへの活動参加等を開始している。5月も準備継続。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用して地域住民対象の菜園研修を実施してきた。3月19～25日にかけてカンボジア事業担当の山崎勝も参加して、3年間の事業評価を実施した。本事業は技術的には定着し持続性が見込まれているが、活動が新規参加者へと広がらないという課題を抱えてきた。このため、活動の直接的な成果や課題のみではなく、広がらなかった原因・背景を分析するためにインタビューを実施した。本事業は2011年度でプロジェクトとしての実施は終了し、今後は他事業との関連において適宜フォローしていく。4月以降は評価報告書を取りまとめている。(渡辺)

スーダン

■紛争による避難民・難民への緊急支援を継続

4月10日、南スーダンは国境を越えてスーダンの油田地帯に侵攻、一方スーダンは南スーダンへの空爆を実施し、両国間の関係は



■カドグリ周辺の紛争で被災した地区で農具を配布。

昨年の南スーダン分離独立以来最悪となった。事態の鎮静化に向けた国際社会の努力の中、JVCは日本政府に対して即時停戦に向けた両国への働きかけを求める要望書を提出した。しかし、依然として紛争解決の見通しは立っていない。

南スーダンのイーダ難民キャンプでは食料は国連が供給しているが、生活用品の支援が追いつかない。JVCは3月下旬から4月上旬にかけ、第2次支援として子ども衣料2,000着を配布した。南コルドファン州内では、州都カドグリ周辺で生活する帰還民と避難民との双方を対象に、間もなく始まる耕作シーズンに向けて4月下旬に農具の配布を実施。5月末には種子の配布を予定している。(佐伯)

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

貧血予防のために 360 人の幼稚園児に対し西岸産の牛乳とガザ産のビスケットを提供する事業は、5 月中旬の幼稚園の学年度終了とともに終了した。子どもたち、母親たち、幼稚園教師たちは、事業を通して学んだことをそれぞれの幼稚園で継続していく。



■家庭訪問で貧血チェックを行なう母親ボランティア（右）。

4 月からはガザ市内で子どもの栄養失調予防を目的とした地域活動を開始。40 人のトレーニングを受けた母親ボランティアが、地域の母親や妊婦たちに貧血や栄養失調、くる病などの予防のための教育を行なう。また、5 歳以下の子どもの成長状態を測定し、貧血などが疑われる場合はクリニックを紹介している。子どもの健康に関する取り組みを行なう地域のネットワークを形成するためのミーティングを実施中。

貧困の厳しい村で 12 家族を対象に実施している養鶏事業では、毎日採れる卵が子どもたちの貴重な朝の栄養源となっている。卵の生産数を増やしており、卵を売って収入を得たり、孵化を成功させ鶏の数を増やす女性もいる。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療 NGO と協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などの活動を展開。医師と保健指導員は保健教育、健康診断、救急法講習などを学校、幼稚園、地域社会団体等で実施中。トレーニングを受けた学校生徒たちは、健康に関する壁新聞を作成したり、スピーチするなど、独自の活動を行なっている。5 月中旬からは学校も試験期間後、夏休みに入る。（福田・津高）

調査研究・政策提言

■第三回及び第四回開発協力適正会議（4 月 16 日及び 4 月 27 日、外務省）

4 月は、16 日の第三回適正会議に続いて、緊急に第四回会議が 27 日に開催された。4 月上旬にビルマ/ミャンマーで選挙が行なわれ、アウンサン・スー・チーさんが議員となったことで民主化が加速され、各国ドナーが支援に向けて動き始めたために、日本政府として早々にいくつかの案件を進めたく、それに対応する必要性が生じたためである。

■国連改革パブリックフォーラム（4 月 27 日、外務省）

3 月 19 日に開催した第 10 回国連改革パブリックフォーラムの反省会を関係課長との間で外務省で行なった。「防災」という時期にあったテーマで、各方面からの発言者も揃い充実した会合であった一方、外務省のマンデイトを超える議論まで広がり、消化不良に終わった点も少なくない。10 回目という節目でもあり、今後のあり方を考えるために、第三者評価を入れることを検討中。（高橋）

アフガニスタン

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

診療所のあるゴレーク村で保健委員会が再編成され、1 回目の会合が 4 月 25 日に開かれた。支援の要請もあったが、村人の健康を守るために「適切なトイレの設置」「井戸水に塩素を入れる」「水溜りの除去」などが必要であることを確認した。そのほか、欠員の出た村の地域保健員の補充のための研修とクズ・カシュコート村からの要請である各種検査のため、診療所から週 1 回技師を派遣することになった。



■スタッフ（右）から研修を受け、意欲をみせる地域保健員。

■教育支援活動

昨年 10 月に続き 3 月末の 4 日間、「授業研究」推進のための指定校クズ・カシュコート中学校初等部で 12 名の教員と 4 日間の実践を行なった。1 回目と同じ教員が授業をして改善点を確認した。保健教育の一環で昨年 9 月から毎月 6 校の中学校で実施している“健康”壁新聞は、担当教員の関心度で対応が異なるため、改善を目指す。

■政策提言

7 月上旬のアフガニスタン東京復興支援会議に向けた議員勉強会の第 2 回目を 4 月 4 日に開催した。カレーズの会現地所長と外務省のアフガニスタン支援室長からの話とともに意見交換。本会議に向け、アフガンでは「ジェンダー」「人権」「ガバナンス（良い統治）」「社会サービスの提供」の 4 分野での提言準備が NGO や CSO 間で進み、日本国内でも NGO 会議のための実行委員会が設立された。（谷山由）

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎国内巡回展

千葉県市川市の八幡市民談話室のギャラリーにおいて、3 月中旬に『ともだち展 in いちかわ』を開催した。これまでに展示されてきたもののなかから、子どもたちの日常が垣間見える「遊び」「夢」「行事」などの絵を分野別に並べて紹介。2011 年の共同制作である「ともだち列車」なども展示した。千葉での開催は今回が初めて。新たな地域の方々に見てもらいたい機会となった。



■市川市で開催された絵画展の会場。

■内部勉強会

朝鮮半島をはじめ、2012 年は六者協議の参加各国で政権交代があり、情勢の変化が予想される。一方で日本では北朝鮮への経済制裁が続き、往来も制限されている。今後の展望を予想し日本の NGO が関与できる可能性について、韓国より講師を招いて内部勉強会を開催した。（寺西）

福島 三春町から

「誰のための農業なのか」
その言葉をかみしめる

震災支援担当（アフガニスタン
事業担当兼任） 谷山 由子



■桜の木の下で車座に。

春になると梅・桜・桃が一斉に咲くことからその名がついた三春町。樹齡千年を越える「滝桜」で有名なこの町も、福島他の地域と同じように震災後、原発の放射能汚染による実害や「風評」による顧客離れに苦しんできました。

この四月二十八日、一年間の農家の努力と現状を知り、取り組みを応援し支援者の輪



■全国からのカンパで導入したソーラーパネル。加工所の電力をまかなっている。

を拡げていこうと、昨年に引き続き三春町の芹ヶ沢農産加工グループ、滝桜花見まつり実行委員会などが主催しての花見まつりが開かれました。

会場の貝山集会场いっぱい

国内ひろば

JVC network

に集まった参加者は、JVCも含め首都圏や福島県内、東北各地から来た人たちで百人ほどにもなりませんでした。交流会冒頭で、JAたむら（福島）の方から「農家の協力ですべての野菜を放射性セシウムの測定機器にかけ出荷するなど万全な対策を講じているのでみなさん安心して食べてください」との説明がありました。

その後に芹ヶ沢農産加工グループの会沢テルさんからの挨拶が続き、やさしい笑顔で歓迎の言葉を述べた後、この一年を振り返り今ほど大変な時はない、と語り始めました。これまで加工所に来ていた女性たちが足を運ぶのをためらっているというのです。

野菜をつくってもそれを出荷するために検査場に三回（検査の予約、検査の実施、結果の受取り、それも出荷する野菜ごとに行かなければなりません。セシウムが出なければいいのですが、出たらまた風評被害につながり周りに迷惑をかけてしまいます。そんな心配までしなければならぬなら野菜づくりをやめたほうがいいのかとは悩んでいるのです。

ゲストとして参加した二本

松市東和地区で農業を営む福島県有機農業ネットワーク代表の菅野正寿さんが語った「農業が誰のため、何のためにあるのかを考えさせられる」という自らに向けた思いは、このままでは農家と私たち消費者側の溝が深まっていくだけだと警鐘を鳴らしているように聞こえました。

◎

この後三つのグループに分かれて車座トークになり、参加者がこの会に参加した動機

やいま思うこと、消費者の立場からまた学生から加工グループの女性たちへの質問が出るなど様々な意見が交わされました。きっとそれぞれが今後につながるきっかけを見つけたように、JVCの福島県内唯一の活動地である南相馬から参加したJVCの一員として、ここで思ったことを考えたことを生産者と歩むための一歩につなげられるよう、実践に結び付けていきたいと思えます。

新スタッフ紹介

加藤 真希

アフガニスタン事業担当



皆さま、はじめまして！…ですが、実は私がJVCにやってきたのはこれが初めてではありません。学生の時に調査研究インターンとしてJVCを体験して以来、多彩なスタッフや、人々に寄り添ってともに成長していくという姿勢に魅力を感じ、いつかまた帰ってきたいと思っていました。大学卒業後にメキシコ留学で地域開発学を学び、現地のNGOでの活動経験を経て、この度アフガニスタン事業の担当となりました。『世界のどこに生まれても、夢とチャンスを持って人生を送れる環境づくりに貢献したい』という自分の軸をしっかり持って、ラテンな雰囲気とはまた異なるこの国についてたくさん学んでいきます。どうぞよろしくお願いします。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

3 月計 1,344,278 円
4 月計 631,124 円

	3 月	4 月
無指定	173,700 円	37,000 円
タイ	22,236 円	0 円
カンボジア	166,265 円	0 円
ラオス	1,000 円	543,000 円
南アフリカ	19,814 円	3,000 円
パレスチナ	309,480 円	20,480 円
アフガニスタン	176,000 円	17,000 円
コリア	0 円	0 円
イラク	100,000 円	0 円
スーダン	202,000 円	0 円
東日本大震災	173,783 円	10,644 円

※上表には「夏 / 冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

3 月計 33,500 円 / 9 件
4 月計 23,500 円 / 7 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としができる手軽な募金方法です。

3 月計 2,228,450 円 / 1,896 件
4 月計 2,230,650 円 / 1,892 件

編集後記

まったくの私事ですが (いつもだな)、今年の 8 月で 40 歳になります。パソコンも普及してなかった中学生の頃からプログラミングに手を染め、本業としても 7 年勤めて気づけばもう四半世紀。いわゆるデジタル業界のその時々の変化を追いかけることに変わりはありませんが、最近は自身のスタンスの変化も感じます。改めて「本業」に本腰を入れなければならないと痛感します。(H)

2012 年度東京事務所インターン紹介

今年の東京事務所は現時点でこの 5 名。開始時は 7 名でしたが、諸々の都合によってこうなりました。その関係で、6 月末まで広報インターンを再募集しています。ご興味ある方はいますぐ東京事務所までご連絡を！



■写真上・左から和泉宮下、佐々木。写真下・左から小池、清水。

和泉宮下 (会員)

消極的で変化の乏しい毎日を何年も過ごし、この先もきつと変わらないだろうと漠然と思っていたが、震災や各国の状況を知り考え方が変わりました。今は、仕事に家事育児にインターンにと毎日アクティブに。あせらず深く学びたいと思います。

小池綾子 (パレスチナ事業)

大学時代に NGO での活動を通して、占領下にあるパレスチナでの理不尽な現実を知り、「自分には何かできないだろうか」と国際協力への道を志しました。インターンを通して開発の現場とそこで働くスタッフの思いを学び、自分なりの国際協力に関わる道を模索したいです。

佐々木康隆 (調査研究・政策提言)

大学の授業やネパール訪問で日本の ODA 政策に興味を沸き、国際協力の一翼を担う NGO がどのように ODA に関わるかを知りたいと思っています。官民の意見交換の場に主体的に関わりながら、国際協力の多角的視座を養いたいです。

清水あゆ美 (ホームページ)

知識もない、経験もない、体力もない、お金もない。JVC で私力になれることは限りなく少量です。イベント情報や現地スタッフが書いたブログをホームページに載せること。微力ですが、これが今の私にできるひとつの小さな支援の形です。一年間しっかり頑張ります。

宮下智衣 (アフリカ事業)

将来は NGO で働きたい、アフリカ好きの女子大生です。アフリカ事業インターン募集の紙を見て「これだ！」と思い応募しました。スタッフの方たちからできるだけ多くのことを学びたいと思います！

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2012 年 7 月～8 月) :

8rukzSK8bR

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

94

Kesennuma



ブイで作ったプランター

東日本大震災による津波で大きな被害を受けた東北の太平洋側沿岸地域。そのひとつである宮城県気仙沼市の鹿折地区に、震災後「みんなが集まれる場所」を目的につくられた仮設市場がある。写真は、漁業が盛んな地元でもともと漁の道具として使われていた丸い「ブイ (浮き)」を加工してプランターにしたもの。ビビッドなオレンジ色をお伝えできないのが残念。市場で展示販売されている。

(宮城県気仙沼市鹿折地区の仮設市場「復幸マルシェ」前にて撮影)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000 円
- ◎学生会員 5,000 円
- ◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション (説明会) にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第 1 月曜日午後 7:00 - 8:30
- ◎第 2・第 4 土曜日午後 2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙 90%、間伐材パルプ 10%) で作成しました。



会員数 (6 月 6 日現在) 合計 1,178 名
(正会員 578 名、賛助会員 600 名)